

《古代筑波山のイメージ》

鹿島灘から内海に入ると 筑波山が聳え立っていた

副会長 鈴木 旭

集

つくば市の北端にある小さな山

筑波山は先端的な研究学園都市として知られた茨城県つくば市の北端にある。『日本三百名山』（山と溪谷社刊）などの登山ガイドブックでは「日本300名山の中で比叡山に続いて低い山」とされ、「大岩がごろごろする山頂は狭い」と言われながら、「展望は抜群だ。大きく広がる関東平野や霞ガ浦のみならず、空気が澄んでいる時期なら富士山や太平洋までも望める」と好評を得てい



る。

鹿島、香取両神宮の奥の院

しかし、われわれ

が筑波山に注目したのは展望がいかとかが、悪いとか、そういうことではない。矢作幸雄先生（元鹿島神宮権禰宜・前筑波山神社権宮司・筑波大学大学院非常勤講師）が、その著『古代筑波の謎』（学生社刊）において「鹿島神宮・香取神宮と筑波山の位置関係」を図で示し、「日本武尊の行路図」を描いて古代関東の自然と地形を示し、こちらを関東の表玄関とするイメージを復元して下さったのである。お陰で、筑波山が古代関東においてどういうポジションを占め

ヤマトタケルの行路図（矢作幸雄作成）

ていたか、具体的な形で理解することができた次第。

たとえば、いま、新利根川は霞ヶ浦や北浦の放流水を合わせて房総半島の東端にある銚子を河口として太平洋に吐き出すようになっていたのであるが、かつてその流域は海であったという。銚子を入り口として、外海の鹿島灘から香取内海に入り込むと右に鹿島神宮、左に香取神宮が恰も鳥居の柱か狛犬のように並び立ち、船に乗って間を通り抜けると正面、北西方向に秀峰筑波山の姿が見えてくるといふ仕掛けになっていたのであった。



古代筑波のイメージ図(矢作幸雄作成)

この構図を見ることによって、われわれは古代における筑波山と鹿島神宮、香取神宮の密接不可分な関係を推察できるのであるが、恰も筑波山を奥の院とし、鹿島神宮と香取神宮が奥の院に通じる表門の門柱でもあるかの如く、どっしりと納まっているように見えるのは何故だろうか。この時になって、私は思ったのだ。鹿島、香取両神宮が創建される前、

その地はどうなっていたのか、と。元々筑波山の拝殿として整備された土地だったのではないかと。その際、多少なりとも参考になるのは、両神宮共、かつては「石の信仰（磐座IIイワクラ信仰）」の祭り場だったという証拠を残していることだ。いわゆる「要石」である。

凸凹一對の要石が物語ること

鹿島、香取両神宮共、境内に要石と称する花崗岩でできた石をお守りしている。単なる石ではない。石の周囲に柵を巡らせた上で、東側に鳥居を立て、拝観の形式を整えている通り、いつの頃から、古い時代から祭祀対象とされたものらしい。鹿島神宮の場合、大部分を土の下に隠し、顔を出しているのはわずかである。上面中央に凹みがあるのが面白い。これに対し、香取神宮のは凸形をしており、鹿島神宮の凹形要石とは一対になっている模様である。

この時、鹿島神宮と香取神宮の不思議な縁に関心が集まるのであるが、両神宮は別なことでも密接な繋がりがあつた。十二年毎に巡って来る午年の奇祭御船祭である。お神輿に移された鹿島神宮の神様が総勢二千人を越える騎馬神人や先導する神々に扮した人々を従えて御座船に乗り込み、大船団を組んで利根川を遡り香取神宮に向かうという神事だ。『古事記』では「建御雷神に天鳥船神を添えて天照大御神が葦原中国に差し遣わした」と書き綴られてある故事を再現



筑波山神社の御座替祭2



筑波山神社の御座替祭1

したものときられているだけに、その勇壯闊達な大船団の姿はあたかも古代水軍の行軍をそのままに観る思いがする。

そのためか、鹿島、香取両神宮共、海洋民族の末裔だったと見られている。実際、矢作先生独自の調査では、『香取文書』（同神宮管理）「海夫注文」は鹿島知行分の津（内港）まで香取神宮が管理していたことを記述しており、香取の末社、天降神社は神代の昔から内海を管理し、船の出入りを把握し続けてきたことを伝えていている。対して、鹿島神宮の場合、内海管理記録は一切なく、外洋、すなわち、太平洋に面する鹿島灘の下津浜に「門番屋敷」という役所があり、鹿島灘を往来する船を監視していたという。

しかし、鹿島の記録がないのは妙なことで、『常陸国風土記』でも鹿島の神や中臣氏（藤原氏のルーツとされる）の祖神について触れられていないのは不自然である。何か、書くことができない事情があったのだろうか。そう言えば、この辺はかつて日高見国という大和朝廷と対立す

る国のあったところである。「景行天皇の条」を見ると、古老の言ったところでは、孝徳天皇の御世に信太郡が置かれた、本の日高見国である、と書かれている。その日高見国に関わりがあったのだろうか。

さすがに矢作先生も「鹿島神宮は外海を、香取神宮は内海を護っていたことになりはしまいか」と的確な判断を下されたが、その背景にある事情について説明するには至っていない。何か、口ごもっておられる雰囲気を残している。改めてお会いする機会があれば、その辺をぜひ聞かせていただきたいものである。それはともかく、香取神宮はともかく、鹿島神宮は元々、日高見国の表玄関として元からあったというイメージがどんどん強くなってくるのは私人であろうか。

歌垣の山と巨玉のペトログリフ

さて、ここまで来れば次に注目されるのは筑波山である。なぜ、筑波山なのか。私はインドネシアのバリ島、韓国の濟州島、ミクロネシアのポンペイ島、パラオ諸島でも同じよ

うな「歌垣の山」に出会い、妙に納得したことがあった。何故か、海洋民族の上陸地点には必ず、「歌垣の山」となるピラミッド（古代山岳祭祀遺跡）があるということだ。古代鹿島、日高見国にあつては筑波山が「歌垣の山」となるピラミッドであつたものと思う。

矢作先生の『古代筑波の謎』に紹介され、筑波山の夫女ヶ原に立てられた石碑にも刻まれているのである



夫女ヶ原石碑前

が、奈良時代、常陸国に赴任したばかりの高橋蟲麻呂が歌垣の山に登り、歌会に加わった時の問答歌（万葉集第十四卷）が載っている。少々間延びしてしまいが、筑波山という山がどんな山であつたのか、知っていただくたためにも読んでおいて欲しいと思う。

老若男女、土地の人も異国の人も、それぞれ楽器を奏で思い思いに歌を詠む。そして互いの友人を紹介し、情報を交換する。中には見知らぬ者同士で恋に落ちる者もあつたかもしれない。重要なことは、知らぬ者同士が顔見知りになり、仲良くなるための場になつたということだ。山（広場）はそれぞれの交歓の場となつたのである。邪悪な集団も善良な人々も皆、群れ集い、仲良しになり、土地に害をもたらすことのないようにしたのである。そういう文脈で理解すると良い。

鷲の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひて 未通女壮士の 行き集いかがふかが歌に 人妻に 吾



夫女ヶ原から筑波山を望む

も交らむ 吾妻に 他も言間
 へ この山を 領く神の 昔
 より 禁めぬ行事ぞ 今日
 みは めぐしもな見そ 言も
 咎むな
 反歌
 男の神に 雲立ちのぼり 時雨
 ふり 濡れ通るとも われ帰ら
 めや

れの情報交換、物々交換を通じて交
 流と融合、和合を実現し、一体感を
 抱いて暮らせる社会を作るための儀
 式であったのかもしれない。その場
 は「裳羽服津」と言われているが、
 どこなのか。諸説あり、①女体山山
 麓の夫女ヶ原とか、②筑波山神社拜
 殿裏とか、③御幸が原とか、言われ
 ているが、矢作先生は広さといい、
 水利といい、夫女ヶ原が人が集まる
 には最も適しており、男女二峰を仰
 ぎ見るにも一番いい場所だと唱えて
 おられる。

私の場合、もう一つ別の理由を追
 加した上で矢作説に賛意を表してお
 きたい。もう一つ別の理由とは、大
 きな目玉のペトログリフが刻まれた
 岩が発見されたことだ。夫女ヶ石と
 呼ばれている夫婦岩のことである。
 二体ある大岩の内、南側の大きな岩
 の上面に面いっばいに広がる大きな
 目玉のペトログリフが刻まれていた。
 滅多に見られない立派なものだ。

目玉のペトログリフは降雨量の少
 ない地域に「雨乞い岩」として祭ら
 れたり、湧き水や井戸、池などがあ



夫女ヶ原の目玉石

れば、それを護る「水神様」となっ
 ているのであるが、水源地となる山
 (聖地)を凝視するように刻まれて
 いるのが常である。夫女ヶ原の目玉
 石も例外ではなく、水源地である男
 女二峰を見上げており、祭祀の思想
 は明快に表現されている。

男女二峰＝二上山の意味

ところで、周辺を見渡せば簡単に
 理解できることであるが元々、夫女
 ヶ原には大規模なイワクラ(磐座)
 があったようで、あちらこちらに大

小の岩を塚状に積み重ねた小山があ
 る。いずれもイワクラを組み上げて
 いた巨石群が持ち去られたか、破壊
 されたか、その残骸であるう。その
 中で目玉のペトログリフが刻まれた
 大岩は運よく生き残った幸運の岩な
 のかもしれない。さすがに手を付け
 られなかったのではないだろうか。
 元々の姿を留めていないのは山頂
 部も同じである。筑波山は男体山(標
 高八七一m)と女体山(標高八七七



男体山山頂部

（註）の二つの峰から成る典型的な二上山になっているのは知られている通りである。いずれも山頂部は、巨大な岩を使って組み上げた壮大な神殿か、何かの建造物があったはずであるが、いまは打ち砕かれた巨石群の残骸が積み重なっているばかりである。所々にありし日の面影を垣間見ることはあっても復元するのはほとんど不可能と言ってよい。



女体山山頂部記念写真

しかし、女体山の下り道にある巨石群、パンフレットには「奇岩・怪石」という言葉で一括りされ



女体山山頂部を下から仰ぐ

ている巨石群であるが、一つひとつにいねいに観察して行けば見るべきところがあり、簡単に通りすぎる場所ではないことは研修旅行当日、私が即席で説明させていただいた通りである。重複を避ける意味で説明は省くことにするが、それぞれが単体の巨岩ではなく、明確な組石になっているだけでなく、女体山を南側の下り道から見上げればちゃんと祭りの形式に配列されていることが判る。一度、詳しく調査しても良いのではないだろうか。

新発見！ 宮山のドルメン

ここまでは通常の筑波山見学と大差ない研修旅行かもしれない。しかしわれわれは、やはり、幸運の星の下に生まれ付いているようだ。筑波山の里宮とされている飯名神社と月水石神社については省略するが、筑波山の里山と言っても良い二つの山お宝山と宮山において、長い間、人目に晒されることがなかったせいか破壊されることなく生き残った貴重なイワクラ（磐座）群を見学することができた。特に旧六所神社跡の北

方、宮山山頂部において完璧なドルメン状のイワクラ（磐座）を発見することができたのはラッキーであった。



写真は後ろ（北側）から写したもので、宮山山頂部に鎮座するイワクラの後姿であるが、このイワクラを支える巨石群がドルメン状に組み上げられているわけで、下側（南側）から上（北側）に向かって競りあがる格好になっている。しかも破壊されることなく、ほぼ完全な組石状態で残されている。こんなことは滅多

にないことで、このイワクラについては改めて調査させていただかなければいけないのではないかと考えている。

正面は南面であり、多分、旧六所神社跡が古くからの拜殿になっていたのではないだろうか。もちろん、旧六所神社跡（南側）から宮山山頂部（北側）にあるドルメン状イワクラを見上げた場合、その延長上にあるのは女体山山頂部のはずである。かつて延暦年間に筑波山を訪れた徳一上人が、この地に六所神社を建立したと伝えられているのであるが、このイワクラの存在を知っていたのだろうか。

おそらくは、元々の筑波山信仰を辿って行けばイワクラ信仰に到達するに相違ないわけであるが、お宝山と宮山のイワクラ群を抜きにしてはあり得ないと思う。いずれ、正確な祭祀ラインを把握し、筑波山信仰のルート、原始信仰の実体を探って行きたい。

筑波山周辺に広がる祭祀場の謎



大形・鹿島神社裏山のご神体岩



大形・鹿島神社前庭



大形・鹿島神社社殿裏のイワクラ



尚、蛇足になってしまいかもしれないが、われわれが最初に訪れた大形・鹿島神社がこれほど完璧なイワクラゾーンになっているとは夢にも思わなかったところで、見学コースに組み入れたのは矢作先生の著『古代筑波の謎』に掲載されていた大形・鹿島神社の写真を見た時の直観である。正面左側に北東方向に向かって組み上げられたイワクラ群がある。気になっていたのであるが、帰宅後、地図を広げたところ、北東方

向に東城寺があった。採石場になっており、祭祀場になっていた可能性がある。怪しい。

また、この鹿島神社から見て北方に筑波国際カントリークラブがあるが、この丘陵地帯を經由して筑波山に直線を伸ばして行った場合、南北祭祀線になるのかもしれない。その意味では筑波国際カントリークラブのゴルフコースにイワクラ群が残されているかもしれない。あるいは、造成工事中に破壊してしまったこともあり得る。一度、ヒアリング調査をしてみる必要があるだろう。

さらに、六所神社の東側、つくばねカントリークラブも見えておく必要があるだろう。この土地も怪しい。何かがなければおかしい場所である。こゝも調査しておく必要があるだろう。ゴルフ場、牧場、果樹園、温泉場、高速道路のあるところには必ず、イワクラがある。覚えておいて損はない法則である。その意味では筑波山周辺のイワクラ調査は、ようやく本番を迎えたと言ってもいいのではないだろうか。



了